

右まわりの竜太

えきす　ときお

竜神の子、竜太は、おとなの竜のような神通力をもっていた。

いたずら好きで、自分でくるくるまわって、つむじ風をおこし、その風で村人たちを空中にまきあげてたのしんだ。村人たちは、地面におちるまえにひとりのこらず、竜太の手でうけとめられた。

「また竜太のいたずらか」

人々は怒ったが、うけとめてくれることをしっているのだれも、本気では怒らなかった。

「竜太」

ある日、竜太は父の竜神に呼びつけられた。

「なんだい、父さん」

「竜というものは昔から、空にまいあがるときは必ず左まわりになるものだ。おまえだけ、右まわりになっている。すぐにあらためろ」

「いやだよ。おれ、みんなとおなじことをするのがいやなんだ。みんなが左にまわってるなら、おれは、右にしかまわらない」

「ききわけのないやつだ」

父親は怒って、口から、ごおっと火を吐きだした。

炎が、赤いすじとなって空をはしるのをみた村人たちは、わらしべを手に、その火のゆくえをおいかけた。竜の吐く火は半月もえつづけるので、みんなはわらしべにもえうつらせてもってかえり、かまどや風呂のたきぎがわりにするのだった。

おおきな台風がちかづいていた。とおくの村では、はげしい風に木は倒れ、家々にもまた被害がでた。

その台風がもうじき、この村にもやってくる。人々はおそれおののき、なんとかならないうものかと、竜神さまにお願いしに、森にかけていった。

「それはだめだ」

村人たちのたのみを、あっさり竜神はことわった。

「いくら竜神さまでも、台風をしずめることはできませんか」

「台風をおそれているのではない。わしら竜はみな、左まわりで空にあがる。台風もまた左回りだ。左に左では、ますます台風はおおきくなってしまう」

がっかりする村人をみて竜神は、ふと竜太のことをおもいだし、ただちによびよせ、わけをなした。

「やってみよう」

いたずらはするが、人間がだいすきな竜太は、さっそく、空にまいあがっていった。

左まわりの台風のなかを竜太は、一生懸命右にまわりつづけた。台風はおとろえていき、やがておだやかな雨となって地上の作物をうるおした。

よくやってくれたと、ほめたたえる村人たちを、てれかくしもあつてか竜太は、また右回りのつむじ風をおこして、人々を空にまいあがらせてはよろこんだ。